

科目名	環境生態論特講	担当者	ムライ 村井 ヒデノリ 英紀	期間	通年	単位数	4
-----	---------	-----	-------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>人は、化学物質等の汚染から安全で、自然の豊かな実りと潤いのある生活ができる環境の維持を求めている。汚染質濃度等は測定可能であるが、生活環境質についての適正な把握・評価のための手法が必要である。</p> <p>生物は、人と環境を共有し、環境の質（陸水、気象、土地利用、植生などの地域生態系）を反映した生物群集を構成している。特に、鳥類は、水やガス等汚染質に敏感で人よりも早く影響が発現しやすく環境の質を適正に反映しやすいことから、環境を生態的な側面から把握する評価軸としての適性が高い。</p> <p>人の環境と生物の関係等に関わる既往研究を広く収集し、生物群と影響との関係を整理して利点・問題点等を考察する。次いで、生活環境の質の評価や持続可能な環境利用に資する研究遂行力を習得する。</p>		
到達目標	<p>(1) 既往研究(鳥に限定しない)を精査し、着目種群と環境との評価手法の利点・問題点等を整理して手法の背景や課題等をまとめる。</p> <p>(2) 地球温暖化に伴う生態系への影響可能性について、シナリオとその予測結果の変遷を整理し、生態系に着目する利点・課題等を議論する。</p>		
学修方法	<p>学修は課題に沿ってレポートを作成し、教員との意見交換 (manaba) を通じて修正し、最終版として提出する。新しい知見・情報を入手するため、website を活用した事例収集とデータの継続的な蓄積が必須である。</p> <p>教材や参考図書を合わせて論理的に考察する。</p>		
スケジュール	<p>前期：教材1のレポート課題(1)の草稿は7月末、課題(2)は8月末までに提出するが、題材について草稿としてまとめる前にメール等で相談し確認すること。いずれの課題も9月中旬までに最終稿として提出する。</p> <p>後期：教材2のレポート課題(1)の草稿は11月中旬、課題(2)は12月中旬までに提出する。題材については、草稿としてまとめる前に展開方針・ストーリー構築等を相談すること。課題の最終稿は、1月課題提出締切日までに提出する。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	80%	<p>課題に沿って論理的に構築されているか。</p> <p>必要な図表、脚注等が適正に提示されているか。</p> <p>自分の意見が適正にまとめているか。</p> <p>教材等を読み込み、十分に理解しているか。</p> <p>既往研究や文献などの情報検索・活用が十分になされているか。</p>
	平常評価	20%	<p>manaba を通じて教員と適宜意見を交換し、コメントを適正に反映して修正しているか。</p>
履修者への要望	<p>参考文献等を読み込んで理解した上で、課題に沿った自分の考え・着想を原点としたかが重要である。背景・変遷等を踏まえて自分の主張に至る構成を検討・吟味し、適正なストーリー展開を行って説得力のあるレポートとしてまとめる。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： R. カールソン 教材名： 『沈黙の春』（新潮社，2004年）ISBN:978-4-10-207401-5 710円+税
	農薬等の化学物質は人への毒性が強く、環境に放出（浸透）すると最初に鳥に影響が発現しやすい。化学物質の環境への浸透と循環・生物濃縮から、同じ環境を共有する人への影響について警鐘を鳴らしたもので、環境を生態的な観点から評価したマイルストーン。
参考図書	D. メドウズ 『成長の限界』（ダイヤモンド社，1972年）ISBN:978-4-47-820001-8 1,600円+税
履修上のポイント	(1)生態に係わる環境の影響・評価手法の変遷と課題。 (2)地球の有限性から、持続可能な利用が重要であることの認識と課題。 (3)人の生活環境を生態的な側面から評価する意義と課題。
レポート課題 1	環境への化学物質等の浸透、循環、蓄積（生物濃縮）による影響について、歴史的な背景を踏まえて議論し、3,000字程度にまとめる。 <b>留意点</b> ：化学物質等による環境への影響事例（生態系に関するもの）を時系列的に整理し、着目された内容と課題等の変遷を議論する。
レポート課題 2	生態的な側面から環境を把握する意味と人の生活環境との関連性を整理し、人の生活環境の質を評価する手法と課題等を3,000字程度にまとめる。 <b>留意点</b> ：既往研究、web等で最新情報を収集する。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 環境省地球環境部 教材名： 『IPCC 地球温暖化第4次レポート』（中央法規出版，2004年）ISBN:978-4-80-584893-7 1,800円 <入手可能なら> R. パチャウリ，『地球温暖化 IPCC からの警告』（NHK出版，2008年）ISBN:978-4-14-081224-2
	地球温暖化は、人間活動によって増加するCO2が原因であり、放置すれば気温増加によって深刻な環境影響をもたらすと警告した。
参考図書	岩槻邦雄，堂本睦子編『温暖化と生物多様性』（築地書館，2008年）ISBN:978-4806713678 2,600円+税 環境省地球環境部『IPCC 地球温暖化第4次レポート』『第5次レポート』（環境省 website からダウンロード可） R. ブラウン，『プラン B 4.0』（ワールドウォッチジャパン，2010年）ISBN:978-4948754362
履修上のポイント	(1)地球温暖化の最新傾向と生態的な側面への影響可能性を整理。 (2)温暖化シナリオと予測の変遷（着目内容と推定），対応策を整理。 (3)人にとって潤いのある生活環境の実現・維持において、環境の生態的な評価に着目する意義と課題。
レポート課題 1	地球温暖化による最新のシナリオに基づく将来像を整理し、それが生態に及ぼす影響可能性と課題を考察する。3,000～4,000字にまとめる。 <b>留意点</b> ：気候変動、温暖化についての既往研究・文献等を収集する。
レポート課題 2	環境を生態的な側面から把握・評価することが、人の生活環境の質の維持と持続的利用に関わる評価軸であることを整理・考察する。 また、それが生物多様性の保全にも重要であり、世界的な取組み（ミレニアム開発目標 SDGs）における基礎的な評価軸ともなることを3,000～4,000字にまとめる。